

- 作品の構成や展開、表現の特徴とくちようについて自分の考えをもつ。
- 語句の意味や擬声語ぎせい・擬態語ぎたいごに注意し、その工夫くふうや効果を理解する。

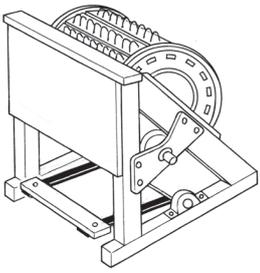
オツベルと象

宮沢賢治みやざわけんじ

……ある牛飼いが物語る。

第一日曜

オツベルとききたらたいしたもんだ。
 稲いなこぎ機械きかいの六台も据すえつ



稲こぎ機械

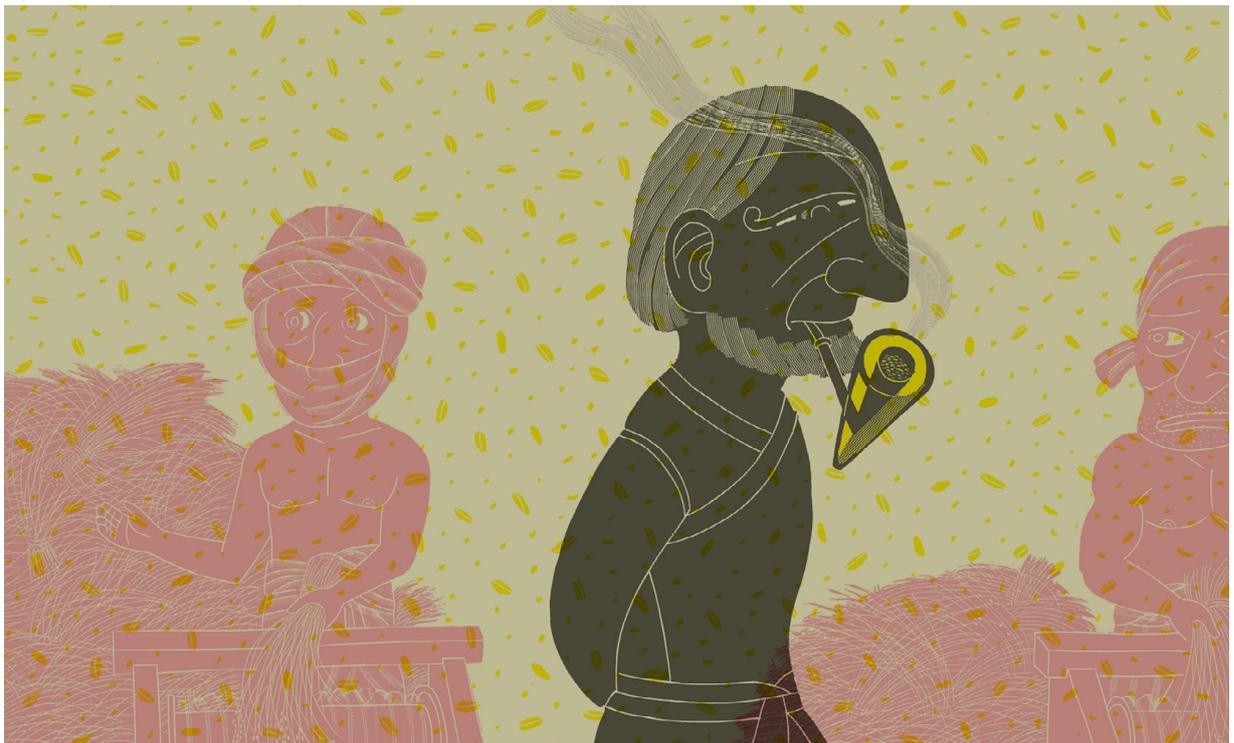
稲 据 姓

おおそろしない ひどく大きな。

意 物語る

けて、のんのんのんのんと、お
おそろしない音をたててやっている。

十六人の百姓ひゃくしやうどもが、顔をまるつき
り真っ赤にして足で踏ふんで機械を回し、
小山のように積まれた稲をかたっぱしか
らこいていく。わらはどんどん後ろの方
へ投げられて、また新しい山になる。そ
こらは、もみやわらから立った細かなち



い象だぜ、ペンキを塗ぬったのでないぜ。どういいうわけで来たかって？ そいつは象のことだから、たぶんぶらっと森を出て、ただなにとなく来たのだろう。

そいつが小屋の入り口に、ゆっくり顔を出した時、百姓どもはぎよつとした。なぜぎよつとした？ よくきくねえ、何をしだすか知れないじゃないか。かかり合っては大変だから、どいつも皆みな、

漠 煙 薄 丈 巾 皆

琥珀 大昔に樹脂じゆしが地中に埋うまって化石になったもの。透明とうめいまたは半透明の黄色いろをしていて、装飾品そうしよくに用いられる。

吹き殻 吸い殻。／六寸 一寸は、約三センチメートル。

文 まるで……ようだ

意 なにせ

対 新式

文 とにかく

一生懸命^{けんめい}、自分の稲をこいていた。

ところがその時オツベルは、並んだ機械の後ろの方で、ポケットに手を入れながら、ちらっと鋭^{すど}く象を見た。それからすばやく下を向き、なんでもないというふうで、今までどおり行ったり来たりしていたもんだ。

すると今度は白象が、片足床に上げたのだ。百姓どもはぎよつとした。それでも仕事が忙^{いそが}しいし、かかり合ってはひどいから、そつちを見ずに、やっぱり稲をこいていた。

オツベルは奥^{おく}の薄暗い所で両手をポケットから出して、も一度ちらっと象を見た。それからいかにも退屈^{たいくつ}そうに、わざと大きなあくびをして、両手を頭の後ろに組んで、行ったり来たりやっていた。ところが象が威勢^{いせい}よく、前足二つ突き出して、小屋に上

がってごようとする。百姓どもはぎくつとし、オツベルも少しぎよつとして、大きな琥珀のパイプから、ふつと煙を吐^はき出した。それでもやっぱり知らないふうで、ゆっくりそこらを歩いていた。そしたらとうとう、象がこのこ上がってきた。そして機械の前のところを、のんきに歩き始めたのだ。

ところがなにせ、機械はひどく回っていて、もみは夕立かあられのように、パチパチ象に当たるのだ。象はいかにもうるさいらしく、小さなその目を細めていたが、またよく見ると、確かに少し笑っていた。

忙 屈

文 ところが

意 いかにも

類 のんき